

## 設立5年目を迎えて

岩崎 博

日本放射光学会 会長



日本放射光学会は設立されてから本年で5年目に入りました。新しい学際領域である放射光科学・技術の進歩発展を図る目的の下に、この領域の学会としては世界で初めて活動を開始して以来、概ね順調に経過してきて居ります。これもひとえに会員諸氏の積極的な御協力の賜物であると感謝して居ります。

学会活動の大きな柱は二つあって、その一つは学会誌の発行であり、他の一つは年会などの学術的会合の開催であります。前者についてこれまでの実績を振り返ってみますと、まず成功であったといえましょう。年4冊の発行が予定通り行われ、各号が充実した内容をもっており、着実に評価を得つつあります。定期発行は当たり前のことだといわれるかもしれませんが、他の学会誌の現実の状況をみていますと、原稿の集まり具合とか、学会の財政事情とかでそれを守るのに大変な苦勞をしているところがあります。わが「放射光」も編集委員長のお話を伺いますと舞台裏は決して楽ではなく、予定原稿の入手にキリキリ舞いをさせられているそうですが、ともかく結果としてキチンと3ヶ月毎に会誌が会員の手元に届いていることは喜ばしい限りです。それによって年4回ながら学会からのお知らせが遅滞なく会員に到達していて、学会の運営を円滑にする原動力となっています。

次に「放射光」の内容ですが、たとえば最新の第5巻第1号を手にとってみますと、「解説」が2篇、「実験技術」が2篇、「座談会」が1篇など広告を除いても115ページにわたって記事が充満しています。「解説」と「実験技術」のどれを読んでも豊富な図と写真の助けを借りて現在もっとも知りたいことが分かるようになっています。本文の後に「キーワード」としてそこで使われた専門語がわかり易く解説してあるのは当を得たアイデアだと思います。これらに加えてこの号からは「放射光基礎講座」が連載され始めました。これは光とか電磁波の話から説きおこして、学生諸氏、非専門家の方々に放射光を深く理解していただくための企画で、読む方は楽でも書く方は骨が折れると思いますが、「放射光」を面白くするための必要不可欠なものであります。

「放射光」は私の当初の予想以上の立派な学会誌となりましたが、会長としてこれに安んずることなく、さらに内容の一層の充実を図るべく、編集委員会のメンバーと研究を重

ねていく所存であります。

一方、学術的会合、特に年会であります。これは東京、東京、大阪、名古屋、仙台と各都市を回って開催されました。それぞれの実行委員会が非常な努力をされて意義のある会合となったことは評価すべきであります。しかし年会への参加者、発表件数などにおいてこのところもうひとつという感じがあることは否めません。これは近年各種の会合の数が増加して、研究者の側からみれば、それら全部に出席する時間的、経済的余裕がないという傾向が背景になっていると思われまふ。また放射光の分野では各施設におけるユーザーミーティングのような会合が毎年開かれていることにも関係しているでしょう。しかし放射光学会の年会では、まず我国の施設の現状、そして建設(あるいは計画)中の施設の進捗状況を一望することができ、その場で質問をして詳しい情報を引き出すこともできます。また装置技術に関する新しい進展なりアイデアなりを見聞し、比較検討することもできます。さらに利用技術についても同様で、論文などで読んでいてもうまくつかめなかつた実験のポイントなどを聞き出すことができます。要するにふだんはなかなか会えない放射光研究者が互いに所属する機関の立場から自由になって交歓する場なのであります。そこから新しい共同研究が芽生えるものもありまふし、人事交流の糸口も見付けられるでありまふ。放射光学会での交歓は、光の利用という観点だけではなく、その光がどのようにして出てくるかを念頭においてなされるものであるはずで、それでこそ放射光科学・技術の進展につながると思ひます。放射光学会の年会と各施設のユーザーミーティングとの相違は、後者では施設に直接に関連した話題、測定したての生データを含む利用の成果、そしてユーザーの実験計画などが主な内容となることにあると思ひます。

会員諸氏にお願いしたいことは、できるだけ年会に御出席いただき、相互の学問的そして人間的交流をはかっていただくこととあります。学会としても企画を練って「今年の年会は面白かつた」と多くの方にいわれるように努力いたします。開催都市の選定に当たつても、単純な持ち回りではなく、しばらくの間は圧倒的に会員数の多い地区での開催頻度を上げるようにすべきだと考えまふ。

最後に放射光科学・技術の後継者養成に関連することを述べたいと思ひます。御存知の方も多いでしょうが、新しい大学院大学として総合研究大学院大学が4年前に開設されました。世界でも初めての放射光科学専攻が設けられており、学生達が高エネルギー物理学研究所放射光実験施設で学んでおりましたが、平成4年3月には第1期生4人がめでたく課程を終了いたしました。新しい学際領域ですから教科書があるわけではなく、教官も学生も創業者の苦勞を味わいまふましたが、これからの我国の放射光分野を担う人達を育てるといふ意気込みで頑張つています。これから毎年学生が巣立っていくわけですが、このような人材を生かすのは本学会に関係しておられる人々と機関なのです。皆様が強い関心を示され、種々な形で協力して下さることを強く希望いたします。